

日 本 の 点 字

第 36 号

目 次

ブライユ伝翻訳余話	金子 昭	1
日本点字委員会ホームページの開設と今後の運営について	加藤 三保子	7
医学用語の点字表記について	日本点字委員会	13
I はじめに		13
II 医学用語切れ続きの指針		13
III 促音、数字表記について		22
IV 数字を含む経穴名等の点字表記		23
V 同音異穴の点字注記		24
VI 漢方薬などの名称の切れ続きについて		29
日本点字委員会第47回総会報告		32
編集後記		34

2012年 1 月

日 本 点 字 委 員 会

ブライユ伝翻訳余話

日本点字委員会副会長 金子 ^{あきら} 昭

本書の翻訳・出版について

日本の点字制定120周年（2010年）記念出版として、National Braille Press から2006年3月6日に発行された C. Michael Mellor 著、“Louis Braille: A Touch of Genius”を日本点字委員会から翻訳・出版する。『ルイ・ブライユの生涯 — 天才の手法』という書名で、株式会社大活字から発売を予定している。

本書はフランス語原文のブライユの数多くの手紙（口述、直筆）を紹介しながら、ブライユの生涯を記述している。メラー氏は歴史家だけあって（リーズ大学で科学史の修士号を取得）、ルイ・ブライユの生涯を当時の歴史的、社会的背景の中で描こうとしていることも、本書の大きな特徴といってよい。巻末注なども含めて丁寧に読むと、メラー氏の意図が伝わってくる思いがする。

翻訳は次のように分担した。「まえがき」と本文の前半を田中美織氏が、本文の後半、挿絵、巻末注を水野由紀子氏が訳文を作成した。それを金子が原文と照合し、田中氏、水野氏と連絡を繰り返しながら、全体にわたって訳文の修正、訳語、用字、用語の統一をはかった。

思いのほか時間がかかってしまった。引用されているブライユの手紙がフランス語からの翻訳であること、本文がフランス革命前後の社会情勢を背景としていることなどから、訳出中に疑問の生じたこともあり、メールで著者に幾度も問い合わせをしながら進めてきた。

点字はいつできたか

点字のできた年について、現在は1825年が通説となっているが、これにも諸説あるのはご存知のとおりである。《点字制定の年はいつなのだろうか。それには諸説があって、1824年説、1825年説、1828年説、1829年説がある。／（中略）点字の原型ができてパリ訓盲院の生徒の間に広まっていたことを指標にすれば1824年説になり、点字配列表等ができて点字器がつくられたことを指標にすれば1825年説になり、パリ訓盲院で点字を使って授業が行われ、6点点字が完成したことを指標にすれば1828年説になり、点字の解説書である『点を使って言葉、楽譜、簡単な歌を書く方法 — 盲人のた

めにつくられた盲人のための本』が出版されたことを指標にすれば、1829年説になるのである》(慎英弘『点字の市民権』生活書院、2010、pp. 13～14)。

他に1834年説、1854年説というのがある。1834年は、先の『点を使って言葉、楽譜、簡単な歌を書く方法』の修正増補が出版された年である。1854年は、フランス政府がブライユ考案の6点式を盲人の文字として公式に認めた年である。先ほどの慎氏の言い方を借りると、「完成品を発表したことを指標にすれば1834年説になり、公認されたことを指標にすれば1854年説になる」であろう。日本の研究者にも、1901年(明治34)4月22日の官報に「日本訓盲点字」として掲載された時をもって日本の点字制定とすべきだという方もいる。

メラー氏は点字の誕生の年について何と言っているか。《ブライユは、15歳[1824年]になるころには、バルビエの一マス12点を半分にして、指の下にぴったりと収まる6点に縮めていた》、《ブライユは、1825年[16歳]までには点字の基本的な形をほぼ完成させていた》(ともに本書から)。

点字のできた年について、筆者はメラー氏の講演においてお尋ねしてみた。日本点字委員会主催の講演会「ルイ・ブライユのすべて」(2009年11月28日、於・日本点字図書館)である。メラー氏の回答は次のようなものであった。

《正確にいつ発明されたかと言うのは難しいのだが、私としてはブライユが点字についてピニエ博士[校長]に話して、記録してもらったとき(he dictated it to Dr. Pignier)だと思う。彼の頭の中にあったものが、きちんと紙に書き取られたのだ。それが1825年のことである。私たち歴史家は年号をきちんとさせるのが好きだが、ブライユの点字は、ある日突然できたわけではなく、長年にわたってつくり上げられてきたものである。一つ確かなことは、彼が非常に若かったということである》と。

盲学校と郵便局

本文に《1816年2月20日、学校はサン・ヴィクトール通り68番地に移転した》という一文があり、この部分の注には、《現在この場所は郵便局になっている。ブライユの150回忌に合わせて、建物の正面に額が飾られた。この額には、「ルイ・ブライユ 1809－1852 世界共通の点字体系はここで考案された。この場所は1816年から1843年まで盲学校として使われていた」と書かれている》とある。サン・ヴィクトール通りにあった王立盲学校に、ルイ・ブライユは入学し(1819年)、6点点字の考案を成し遂げたのである(定説1825年)。その後、王立盲学校のあった建物は兵舎や倉庫と

して使われていたが、1935年に解体され、その跡地にはパリ第28郵便局の建物が建っているという。

ここで思い出したことがある。筑波大学附属視覚特別支援学校と同聴覚特別支援学校の母体となった^{らくぜんかい}楽善会訓盲院の校舎が、1879年(明治12)12月、京橋区築地3丁目15番地に完成した。またルイ・ブライユの発明した点字を基に翻案された石川倉次の案が、この学校において1890年(明治23)11月1日に日本点字として制定された。2010年11月1日に、学校創立130周年、日本点字制定120周年を記念して「東京盲啞学校発祥の地・日本点字制定の地」の記念碑が東京都中央区築地4丁目の^{いちばやし}市場橋公園内に建立され、除幕式が挙行された。この校舎は、現在の京橋郵便局の辺りだったという。

それぞれの校舎はどのようなものだったのだろうか。

ブライユの入学した王立盲学校は…。《そのほとんどが200年以上前に建てられたこの建物は、もともと神学校であったが、革命中は一時的に牢獄として使われていた。内部には、狭い階段が二つあり、男子用と女子用にきちんと分けられていた。一人で歩くためには手を使って確認しなければならない生徒にとって、湿ってべとべとした壁とぐらぐらする階段は、「見えない子どもたちが挑む課題であった」》、《学校は老朽化した建物で、革命時には^{せつ}節を曲げようとしない僧侶たちの牢屋として使われていた。1792年9月に王政が終わると、彼らは4階の窓から投げ出されて処刑された》、《医師であるピニエ〔校長〕は、^{むしば}湿っぽく換気の不十分な建物が生徒の健康を蝕んでいることに気が付いた》(本書から)。

一方築地の校舎は、御雇い外国人技師、ジョサイア・コンドル(イギリス人)が来日して初めて設計した建物で、2階建て^{れんが}総煉瓦造り、室内^{しつくい}総漆喰塗り、ロマネスク風の大変モダンなもので、当時の評判となった。1891年(明治24)まで使用された。コンドルは後に、鹿鳴館や神田ニコライ堂などを設計した。

王立盲学校と東京盲啞学校…、校舎のイメージにはかなり明暗の差があるようだが、世界の点字を考案した王立盲学校校舎の跡地は郵便局となり、日本点字制定を成し遂げた東京盲啞学校校舎の跡地は、郵便局の辺りだという話(ぴったり跡地というわけではない)。

聞いた話だが…。楽善会訓盲院の跡地は、市場橋公園から北東に数十メートル、通りをはさんで向かい合うあたりで、通りに面していたのではなく、少し奥に入ったところだったようである。現在の住居表示では、中央区築地4-5-12にあたり、「すしざんまい」というすし屋になっている。ちなみに京橋郵便局は、中央区築地4-2

ー2である。

日本の点字を思う

本書でメラー氏がしばしば語っておられるように、フランスにおいても英米両国においても、ブライユの考案した点字がすんなり受け入れられたわけではなかった。その点、日本では1890年（明治23）の点字翻案以来、文字など基本的な部分については何ら変更されることなく今日まで続いてきた。《今後に至り此^{これ}よりも一層良き案の出来ることあれば、速かにそれを用ひることを議決した》（1890年11月1日第4回点字撰定会）のにもかかわらず、その後《此よりも一層良き案》の出てくることはなかった。

イギリスに起こった線字戦争（Battle of lines）やアメリカに起こった点字戦争（Battle of points）の類も、日本では経験しなかった。アメリカにおいてあまりにも混乱している状態に、「盲人向けの新しい文字体系を発明する人がいたら、その場で撃ち殺す」と叫んだ人のことが本書に紹介されているが、そうしたことも日本では起こらなかった。教師と生徒が一丸となって、これからの視覚障害者の文化のために、少しでもよいものを創造しようと取り組み、努力した日本点字翻案当時の先達の叡智と決断に敬服するのみである。メラー氏の著書は、そうした外国の点字と日本の点字の運命の違いも我々に教えてくれると思う。

相互コミュニケーションのために

常々ブライユは、生徒が1年のほとんどを盲学校で暮らし、家族や友人から孤立していることを嘆いていた。見えない者が手紙で連絡を取り合うのは困難で、読んだり書いたりするには見える人の助けを借りなければならなかった。彼は晴眼者と同じ文字を自力で書けるシステムの研究を始め、30歳のときデカポワン（decapoint）を開発した。縦10×横10の点のパターンで普通のアルファベットの形を針で表すようにした点線文字である。穴の形をたどって盲人も晴眼者も文字を読むことができた。最初はグリッド（格子）とボード（盤）（と点筆）という道具（点字盤のようなもの）で書いていたが、後年ラフィグラフ（点字タイプライターのようなもの）を友人と共同で発明し、文字の小型化・機械化に成功した。のちにカーボン紙を間に入れることで、点に加えて、書いた文字が黒く打ち出されるようにもなった。タイプライターが登場する1870年代までの30年余りの間、墨字はラフィグラフによって書くことが、見えな

い者にとって最良の方法であった。

本書にもデカポワン、グリッド（格子）・ボード（盤）、ラフィグラフの仕組みが詳しく紹介されている。たとえば言う、次のようなことであろう。「点字を手で書くときは点字盤を使い、それを機械で書くときは点字タイプライターを使う。同じようにデカポワンを手で書くときにはグリッド（格子）・ボード（盤）・点筆を使い、それを機械で書くときにはラフィグラフを使った」と。

そう言えば石川倉次氏も「明盲共通字」を考案している。

《同氏〔石川倉次氏〕はこの點字から更に明盲共通字を考案して、〔明治〕三十三年八月二日の「日本新聞」に「自樂」と號して、その便利を説き、また同月発行の「教育公報」第二三八號に、その組織を説明した。／左に氏の説明書を掲げる。／明盲共通字トハ、明者ト盲人トノ間ニ通ズル文字ト云フ意味デ名ヅケタモノデ、世界唯一ノ新字ト云ツテモヨイト思フ。ソノ形ハ盲用ノ點字ト殆ド同ジデアル。違フノハタバ點字ヲ目ニ見易ク、墨字ニシタバケデアル。コノ文字ヲ紙ノウラカラ針デツキ出ストキハ盲人ニモスグヨメル點字トナルノデアル。／（中略）コノ文字ハ六點ヲ基ニシテ成立ツテキルカラ、強力ノ針デツキヌイテ表ス器械ヲ造ルトキハ、薄イ紙ナラバ同時ニ數十枚ヲ同ジ文句ヲ記シ行クコトモデキル》（日下部重太郎^{じゅうたろう}『現代國語思潮』中文館書店、1933、pp. 296～297）。

第一案～第三案があるが、第三案が最終案だと思われるので、それによって例を挙げて形を説明する。点字から筆記体に変化させたものである。「カ」は「\」に似た形（から）、「キ」は平仮名の「し」に似た形（から）、「ク」は数字の「7」に似た形（から）、「ケ」は大文字の「G」に似た形（から）、「コ」は平仮名の「く」に似た形（から）、「マ」は発音記号の「ə」に似た形（から）、「ミ」は小文字の「h」に似た形（から）、「ム」は片仮名の「コ」に似た形（から）、「メ」は数字の「0」に似た形（から）、「モ」は小文字の「d」に似た形（から）、といった具合である。

面白いことに（と言おうか）、石川氏の同じ案が、他の資料では「盲啞共通文字」として紹介されている。

《嘗て日本の盲人用點字を發明された石川倉次氏が、更にこの點字を^{れんてつ}連綴して、^{ひとつ}一の文字を作られたのである。氏はこれを以て一般の國字としたいといふ希望を抱かれてをるが、（中略）不可能なことである故、（中略）もしこの文字が盲啞共通文字と

して制定され、世界の盲啞教育に貢献する所があれば、この文字の發明に對しての報酬は十分に得られたものといはねばならぬ。余はこの盲啞共通文字が特殊用の完全な文字として成効することを祈るのである》(高橋龍雄『世界文字學』同文館、1908、pp. 307～309)。

筆者はこれについて詳しく知らない。実際に使われたものなのか、あるいは提案に終わったのか、使われたとしたらどのように使われたのか…。そのあたりをご存知の方がおられたら、ご教示いただきたい。

点字の發明者ルイ・ブライユは見える人と見えない人が文通できる「デカポワン」を、日本点字の翻案者石川倉次は「明盲共通字」、「盲啞共通文字」を考案していることをお伝えしたかったのである。

最後になったが、この翻訳を完成にまで導いてくださった方々にお礼を申しあげたい。フランス語関係で明石泰代氏、キリスト教関係で山岡^{さんじ}三治氏のご指導をいただいた。またできあがった翻訳文を、加藤^{み お こ}三保子、塩谷^{しおのやおさむ}治、当山^{とうやまひらく}啓、藤野^{かつよし}克己の各氏に目を通していただき、貴重な助言をいただいた。特に加藤氏には、原稿の修正作業など事務的な面で大いに助けていただいた。

「翻訳余話」の「余話」をいいことに、まとまりのないことを書いてしまった。読み返してみると、外国と日本の比較論のようになった感もある。多言多謝。

日本点字委員会ホームページの開設と今後の運営について

日本点字委員会ホームページ開設検討委員 加藤 ^{み お こ}三保子

2011年9月1日9時50分、日本点字委員会のホームページがオープンしました。まだオープン間もない状態ですが、順調に滑り出しています。

開設検討委員を務めた一人として、ホームページオープンまでの経過とホームページの内容、基本的な考え方をご紹介しますとともに、運営や今後の課題について、私見も加えて述べさせていただきます。

提案

ホームページ開設のきっかけは、2010年6月5日・6日に行われた第46回総会における、近畿点字研究会からの「日点委は、総会で提案され、議論し、合意を得たことを迅速に知らせ、普及する努力をもっとすべきである。インターネットの活用もその一つの方法ではないか」という提案でした。

以前から、日点委での決定事項の普及方法が限られていることは課題となっていました。また、点字・点訳に関わる人の中からも、「日点委のことはどこで知ればいいのか」という声も聞かれ、日点委の社会的認知度は今ひとつであったことは否めません。日点委そのものの周知も課題であったわけです。ホームページ開設の機運は熟していたと言ってよいと思います。

第46回総会では、次回総会までに、開設に向け具体的に検討することが決定されました。

検討経過

総会の決定を受け、8月から事務局内にホームページ開設検討委員会を設置し、さっそく検討を開始しました。そして、基本的な構想を11月に「日点委事務局からのお知らせ No. 10」として、委員・事務局員・会友に報告し、意見を求めました。

寄せられた意見を基に、より広い立場で具体的に進めていくために、委員を9名に増員し、このメンバーで実質的な検討に入りました。

2011年3月5日には、具体的に内容の検討を行うとともに、発注先の候補を決定しました。これを、「日点委事務局からのお知らせ No. 11」で報告し、案について賛否を

求めました。

発注先は、複数の候補の中から、全国視覚障害者情報提供施設協会（全視情協）ホームページの構築などに実績があり、構築後のサポート体制が整い、迅速な対応が可能な、株式会社システム工房エムを総会に提案することになりました。

4月16日には、ホームページ開設検討委員と発注先候補業者であるシステム工房エムとの打ち合わせを行いました。さらに5月7日にも会議を行うとともに、メールでも意見を交換して、6月4日・5日に行われた第47回総会には、サイトの基本的姿勢、サイトマップ、トップ画面案などを提案することができました。

このような経過を経て、総会では委員会の提案通りに承認され、日点委ホームページの開設が正式に決定しました。

総会後、発注業者と契約、それからの2か月余りは、連日メールによる活発な意見のやりとりが行われました。各ページの原稿準備、細かい字句の修正からレイアウトの方法、ダウンロードデータの準備、また検索のやりやすさ、スクリーンリーダーでの読みやすさ等々、この夏の暑さも忘れるほどで、あっという間に9月1日を迎えたという感じでした。予定通り9月1日にオープンすることができたのは、担当者全員の奮闘の賜であると同時に、私たちの要望に素早く対応してくださったシステム工房エムの方々のお陰です。感謝申し上げます。

なお、ドメイン名の〈braille.jp〉は、加藤俊和委員から無償提供していただき、日点委に最も相応しいドメインを取得することができました。

ここで改めて、このホームページの開設の目的と基本的な考え方を、第47回総会資料から抜粋して、記します。

ホームページ開設の目的

- (1) 日本における点字表記法の唯一の決定機関である日点委の研究成果や決定事項を迅速に正確に報告し、普及・徹底する。
- (2) 日点委の事業内容・出版物等を広報する。
- (3) 点字のしくみや点字の歴史等に関する啓発を行うと共に、日点委で必要と判断した国内外の点字に関する話題を広報する。
- (4) 委員・事務局員・会友への各種報告・連絡の場とする。

ホームページの基本的考え

(1) 音声環境での利用者・ロービジョンにもアクセシブルな構成とする。

① テキスト読みだけで理解しやすい構成とする。音声でも必要な部分へなるべく早く到達するように工夫をする。どの音声ソフトでも読みやすいように工夫する。

② ロービジョンへの配慮として、標準状態でも見やすいように、見かけの文字の大きさを考慮し、白黒になっても区別が付くようなコントラストを確保するなど、拡大や色彩変更をしない状態でも十分見やすい画面とする。また、画像の上に文字を載せたり、文字とのコントラストがとれない壁紙に文字を載せたりするような構成は避けた、単純なレイアウトにする。ホームページに入った所で、文字の大きさや背景を選択できるようにする。文字選択の場所がわかりやすいようにする。

③ ダウンロード用ファイルは、点字データ（BESデータを基本とする）及び墨字データ（墨点字を正しく表示するためにPDF形式を基本とし、必要に応じて、テキスト形式、Excel形式等）を用意する。

(2) 一般公開用ページと会員（委員・事務局員・会友）ページを設定する。

会員ページにはID・パスワードを設定し、必要に応じてパスワードを更新する。

ホームページの内容

主な内容は、お知らせ、日点委の紹介、会則、沿革、歴代委員、書籍紹介、「日本の点字」バックナンバー、国内外の点字に関する話題提供、啓発、構成団体一覧、会員向けには総会議事録、総会前の議題資料、専門委員会からのお知らせなどとする。また、日点委の概要は英語版も準備する。

1. 一般ページ

① トップページ

a. お知らせ、お知らせ履歴

b. 日点委通信、バックナンバー

English Site 日点委の概要、連絡先

c. お問い合わせ住所・電話番号・FAX、お問い合わせメールフォーム

② 日点委とは

- a. 日点委の概要
- b. 会則
- c. 沿革（略年表）、歴代委員名簿
- d. 現在の役員・委員・事務局員一覧

③書籍・資料

a. 販売書籍

「日本点字表記法」「点字数学記号解説」「点字理科記号解説」「日本の点字100年の歩み」「試験問題の点字表記」「資料に見る点字表記法の変遷」の内容・目次の紹介、購入方法のご案内

b. 「日本の点字」

創刊号からの一覧と各号の目次、購入方法のご案内。第1号～第30号は点字データをダウンロードできるようになっています。

c. 規則に関する資料

「日本点字表記法2001年版」発行以降に、規則の補足や改訂された内容を紹介。資料内容のダウンロードができます。

④点字の話題

国内外の点字に関する話題を紹介したり、日点委が作成した点字の普及のための資料類を紹介します。

現在は、2008年に発行した「点字を読んでみよう」のパンフレットの内容紹介を掲載しています。データのダウンロードもできます。

⑤構成団体一覧

構成団体一覧には全日本盲学校教育研究会に所属する学校、日本盲人社会福祉施設協議会の点字出版部会・情報サービス部会に所属し、点字に関するサービスを行っている施設のHPへのリンクを掲載しています。関連団体として、全国盲学校長会、日本盲人会連合、全国視覚障害者情報提供施設協会、日本盲人福祉委員会、北米点字委員会（BANA）のリンクも紹介しています。

2. 会員専用のページ（委員・事務局員・会友向け）（ID・パスワードを設定）

①事務局からのお知らせ

②専門委員会からのお知らせ

③総会議事録（各年度の議事録）

④総会資料（総会前に、議題や発表資料を掲載します。）

【ホームページトップ画面】

<http://www.braille.jp/>

日本点字委員会 Braille Authority of Japan (日点委)	English Site
大 き く 中 標 準 小 さ く 白 色 反 転 ■ メ ニ ュー トップページ お知らせ 日点委とは 書籍・資料 点字の話題 構成団体一覧 会員専用ページ	● トップページ  読みやすく、書きやすく、わかりやすい 点字表記をめざして 日本点字委員会は、日本における点字表記法の唯一の決定機関です。 ▶ お知らせ 2011.09.01 ホームページ開設にあたって お知らせ一覧へ ▶ 日点委通信 2010.11.01 日点委通信 No.26 2009.10.01 日点委通信 No.25 2008.11.01 日点委通信 No.24 日点委通信一覧へ
事務局 〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4 日本点字図書館内 電話 03-3209-0671 FAX 03-3209-0672 お問い合わせはこちら Copyright(c) 2011 Braille Authority of Japan All rights reserved.	

今後の運営と課題

ホームページはオープンで終わりではなく、これからの更新、運営がそのサイトの評価を決定します。

ホームページを日点委の広報媒体として適正に運営・管理し、正確な情報を迅速に発信できるようにするために、ホームページの運営担当者6名が会長から委嘱され、事務局内に位置づけられました。担当者は、事務局長を責任者として、メーリングリスト等を活用し、掲載内容の提案・協議、原稿の確認、業者との連絡、更新の依頼等を行っています。

早速、一般ページでは、第47回総会で出された「医学用語点字表記専門委員会」の答申を受けて、日点委の方針、答申内容の普及・広報の仕事をしています。さらに、委員・会友・事務局員に向けては、第47回総会の議事録を掲載しなければなりません。

このホームページは日点委からの情報発信を中心とするものの、ホームページの問い合わせメールで寄せられた問い合わせ等について、対応方法を検討し、処理することも担当者の大切な仕事です。

問い合わせの中には、点字表記に関する質問もおそらく寄せられるでしょう。それについては、日点委の目的・性格に鑑み、質問者が求める○×式の回答をすぐにお返しするのは難しいことを理解していただくことも役割の一つと考えます。また、「表記法」についてではない、他の書籍や他団体への質問なども含まれることが予想されますので、それらの団体への橋渡しを行うことも必要です。もちろんお答えできることは、担当者間で十分協議の上お答えしていきます。また、規則の変更や新たな提案に対しては、総会での討議へ委ねるなどの処理もあるかもしれません。

私は、2002年度から事務局員として日点委に参加させていただいていますが、日点委の活動は、これまで、各地域での研究活動は別として、総会、「日本の点字」の発行、「日点委通信」の発行、それぞれが年に一度の、いわば「行事」でした。ホームページの運営は、とぎれなく情報を提供し続ける連続的な活動です。担当者間のメーリングリストも、いろいろな背景を持った委員・事務局員間の距離を縮めているように見え、日点委の新たな活動の形が始まったことを感じています。今後は、担当者のみならず、委員の皆様全員のご協力を得ながら、運営していかなければならないと思います。皆様にホームページをたびたび訪れてチェックをしていただくことが、ホームページの質を高めていくことにつながります。日点委委員・会友・事務局員の皆様にホームページを愛していただきたいと思います。

全視情協が運営する視覚障害者情報総合ネットワーク「サピエ」の個人会員が、今年9月で9000人を超えようとしています。インターネットは情報を発信する側にも、情報を収集する側にも欠かせないアイテムになっています。日点委も、日本における唯一の点字表記の決定機関である私たちの研究活動を広く知っていただくとともに、国内外の点字に関する情報を積極的に発信していく姿勢を持ち続けなければならないと思います。

医学用語の点字表記について

日本点字委員会

I はじめに

2011年6月5日、日本点字委員会第47回総会は、それまで4年にわたって討議してきた、医学用語点字表記専門委員会による答申を受けて審議した結果、本書のように決定した。

本書によって、今後のあん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の国家試験問題と全国の特別支援学校（盲学校）並びに視覚障害関係諸施設において使用されている教科書等の点字表記が統一されることを望んでいる。

II 医学用語切れ続きの指針

1. 短い複合語

区切ると意味の理解を妨げる短い複合語や、短い略語は、ひと続きに書き表す。また、内部に助詞などを含んでいても、1語として熟している短い複合語も、ひと続きに書き表す。

[例]	ハイエン（肺炎）	ハリシ（はり師）	ウノー（右脳）
	ヒンニョー（頻尿）	イチョー（胃腸）	キンマク（筋膜）
	ノーシ（脳死）	ゼツガン（舌癌）	
	テクビ（手首）	ハナカゼ（鼻風邪）	ケアナ（毛穴）
	カタコリ（肩凝り）	フクラハギ（脹ら脛）	ツチフマズ（土踏まず）
	バネユビ（バネ指）	ハイシャ（歯医者）	ムシタオル（蒸しタオル）
	セキソン（脊損）	セキチン（赤沈）	ガンシン（眼振）
	センコダツ（先股脱）		
	カミノケ（髪の毛）	ウオノメ（魚の目）	カンノムシ（疳の虫）

2. 接頭語・接尾語など

接頭語や接尾語または造語要素などで、副次的な意味の成分は、自立可能な意味の

成分に続けて書き表す。

【例】 <u>サ</u> シンシツ（左心室）	<u>ダイ</u> ドーミャク（大動脈）
<u>ケイ</u> シンケイ（頸神経）	<u>シャ</u> コッセツ（斜骨折）
<u>カ</u> ガイテン（過外転）	<u>ビ</u> シッカン（鼻疾患）
<u>ト</u> バンジョーキン（頭板状筋）	<u>ガク</u> 2 フクキン（顎二腹筋）
<u>ゼン</u> セイチューセン（前正中線）	
ハンシャ <u>キュー</u> （反射弓）	トーニョー <u>ビョー</u> （糖尿病）
ヒナイ <u>シン</u> （皮内鍼）	シンサツ <u>シツ</u> （診察室）
オトガイ <u>コウ</u> （オトガイ孔）	ビタミン <u>ザイ</u> （ビタミン剤）
シスー <u>ベン</u> （指数弁）	ハイドーミャク <u>コウ</u> （肺動脈口）
リンパセツ <u>シュ</u> （リンパ節腫）	ダイタイコツ <u>ケイ</u> （大腿骨頸）

【注意 1】 接頭語や造語要素であっても、後ろの成分に対して連体詞的な関係を持ち、意味の理解を助ける場合には、発音上の切れ目も考慮して区切って書き表す。また、語尾の造語要素などが、前の成分を受けているような場合、意味の理解を容易にするために、区切って書き表す。

【例】 <u>コウ</u> □ウイルスヤク（抗ウイルス薬）	<u>コウ</u> □セイシンヤク（向精神薬）
<u>ヒ</u> □トクイテキ（非特異的）	<u>ヒ</u> □コージョーセイ（非恒常性）
<u>チョー</u> □テイタイオン（超低体温）	<u>ボー</u> □セキチューキン（傍脊柱筋）
<u>ケイ</u> □ジカン□カンセン（経耳管感染）	<u>リョウ</u> □ビモーカン（両眉毛間）
アンマ□マッサージ□シアツシ _ニ □ハリシ _ニ □キューシ□ <u>ト</u>	
（あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師等）	

【注意 2】 語頭にある接頭語や造語要素が、マスあけを含む複合語全体にかかる場合には、その後ろを一マスあけて書き表す。

【例】 <u>チョー</u> □ボシ□シンキン（長母指伸筋）
<u>セン</u> □ヒコツ□シンケイ（浅腓骨神経）
<u>ナイ</u> □コーモン□カツヤクキン（内肛門括約筋）
<u>コ</u> □セキズイ□シショーロ（古脊髓視床路）
<u>ジョー</u> □ショーノー□ドーミャク（上小脳動脈）
<u>ダイ</u> □コートー□シンケイ（大後頭神経）
<u>ソー</u> □チョーコツ□リンパセツ（総腸骨リンパ節）
<u>カ</u> □カンセツ□トッキ（下関節突起）

オー□コーガイ□ホーゴー（横口蓋縫合）

キョー□シンゾー□シンケイ（胸心臓神経）

シツ□ジュージ□ジンタイ（膝十字靱帯）

3. 2拍以下の自立可能な意味の成分を含む複合名詞

複合名詞の構成要素のうち、2拍以下の自立可能な意味の成分は、区切ると意味の理解を損なうおそれのあるときは続け、独立性が強く意味の理解を助けるときは後ろまたは前の自立可能な意味の成分との間を区切って書き表すことを原則とする。

- [例1] ニョーサイカン（尿細管） キンボースイ（筋紡錘）
 キンセンイ（筋線維） ノーシンケイ（脳神経）
 ハイドーミヤク（肺動脈） ゼツニュートー（舌乳頭）
 カタカンセツ（肩関節） イアッコン（胃圧痕）
 チツゼンテイ（腔前庭） ハイジュンカン（肺循環）
 エンカイナイキン（円回内筋） イカメラ（胃カメラ）
 テツアレイ（鉄亜鈴） コツカンシ（骨鉗子）
 サイボーマク（細胞膜） タンパクニョー（蛋白尿）
 セイタイヒダ（声帯ひだ） ケッチョーヒモ（結腸ひも）
 ソーキガン（早期癌） ジョーイノー（上位脳）
 ハイセイシン（肺性心） ケツエキガス（血液ガス）
 キョクショネツ（局所熱） シントーアツ（浸透圧）
 1 2 シチョー（十二指腸） 3 カクキン（三角筋）
 ケンコーカキン（肩甲下筋） センシクッキンケン（浅指屈筋腱）
 ナイブンピツセン（内分泌腺） カイセンジュツ（回旋術）
 ムコンキュー（無痕灸） シュジュツダイ（手術台）
 セキズイネコ（脊髄ねこ）
 テサンリ（手三里） コショーカン（腰陽関） アシゴリ（足五里）
 ノーコーソク（脳梗塞） イカイョー（胃潰瘍）
 カンコーヘン（肝硬変） ハイキシュ（肺気腫）
 コツニクシュ（骨肉腫） テニスヒジ（テニス肘）
 5 0 カタ（五十肩） スペインカゼ（スペイン風邪）
 インケイ□ワナジンタイ（陰茎わな靱帯）

エイン□ケンチューシン（会陰腱中心）

ジョー□チャーカンマク□ドーミヤク（上腸間膜動脈）

クルマイス□テニス（車椅子テニス）

〔例2〕 キン□シューシュク（筋収縮）

キン□トースス（筋トースス）

ガス□コーカン（ガス交換）

キソ□タイシャ（基礎代謝）

ヒフ□ハンシャ（皮膚反射）

セキ□ハンシャ（咳反射）

コツ□ハカイ（骨破壊）

ウツ□ジョータイ（うつ状態）

ノー□ケツカン（脳血管）

ジン□ズイシツ（腎髄質）

カン□キノー（肝機能）

ドク□カクサン（毒拡散）

アツ□バランス（圧バランス）

カン□セイケン（肝生検）

イ□センジョー（胃洗浄）

コツ□イショク（骨移植）

キュー□チリョー（灸治療）

イリョー□ミス（医療ミス）

ノー□ゲカ（脳外科）

ジン□フゼン（腎不全）

キン□マヒ（筋麻痺）

ノー□キョケツ（脳虚血）

ハイ□キキョ（肺気虚）

ヒ□ヨーキョ（脾陽虚）

ハイ□センイショー（肺線維症）

スイ□コーヘンショー（脾硬変症）

アツ□ジュョーキ（圧受容器）

ゼツ□セイチューコー（舌正中溝）

キン□ヒロー（筋疲労）

ノー□ケツリユー（脳血流）

イ□ウンドー（胃運動）

テツ□タイシャ（鉄代謝）

ケン□ハンシャ（腱反射）

ニョー□シツキン（尿失禁）

コツ□サイセイ（骨再生）

シン□シツカン（心疾患）

コツ□キシツ（骨基質）

ノー□ジツシツ（脳実質）

ハリ□シゲキ（鍼刺激）

ネツ□コーカ（熱効果）

シン□エコー（心エコー）

ハイ□セツジョ（肺切除）

ハリ□チンツー（鍼鎮痛）

ガス□メツキン（ガス滅菌）

シカ□イシ（歯科医師）

コツ□エシ（骨壊死）

ハイ□スイシュ（肺水腫）

カン□ケツキョ（肝血虚）

コツ□ソショーショー（骨粗鬆症）

ヒザ□クツキョクイ（膝屈曲位）

チツ□ジョーミヤクソー（腔静脈叢）

ハナ□アレルギー（鼻アレルギー）

キン□カキンチョー（筋過緊張） コツ□シンチグラム（骨シンチグラム）
ケン□ホーゴーホー（腱縫合法） コツ□ナンコツシュ（骨軟骨腫）
 シショー□カブ（視床下部） ナイカ□イシ（内科医師）
 ローテーター□カフ（ローテーターカフ）
 アンギオテンシン□ニニニニ（アンギオテンシンⅠ）
 ケイシンケイ□ワナ（頸神経わな）
 トー□フカ□シケン（糖負荷試験）
 テিশューハ□ハリ□ツーデン（低周波鍼通電）
イ□ケッチョー□カンマク（胃結腸間膜）
イ□ヒ□カンマク（胃脾間膜）
 カ□ヒ□1 2 シチョー□リンパセツ（下脾十二指腸リンパ節）
 キン□イシュクセイ□ソクサク□コーカショー（筋萎縮性側索硬化症）
 アツ□ハッカカン□ハンシャ（圧発汗反射）
 カタ□カンセツ□キコー（肩関節機構）
 ノー□シンケイ□ゲカ（脳神経外科）
 ノー□シンケイ□サイボー（脳神経細胞）
 コージ□ノー□キノー□ショーガイ（高次脳機能障害）
 ヒト□タイ□ヒト□ジンコー□コキュー（人対人人工呼吸）

補足 1 [例 1] には、区切ると意味の理解を損なうおそれのある語を集めた。これらの語は、ひと続きの名称や呼称としての性格が強い。

[例 2] には、2 拍以下の成分の独立性が強く区切ると意味の理解を助ける語を集めた。これらの語は、成分を列挙して現象や行為等を説明している。

補足 2 病気に関係する語に病名と病態の表現がある。病名は、特定の病気を指し示す語であり、6 拍以下程度のものでは区切ると意味の理解を損なうおそれがある。脳梗塞、胃潰瘍、肝硬変、肺気腫、骨肉腫、テニス肘、五十肩、スペイン風邪などは、その観点で [例 1] に掲げた。

病態の表現は、病気の際に現れる症状や病変などを指し示す語であり、区切ると意味の理解を助ける。腎□不全、骨□壊死、筋□麻痺、肺□水腫、脳□虚血などは、その観点で [例 2] に掲げた。

しかし、病名か病態の表現かの判断に迷うものも少なくない。そこで、書き手

が両者を区別し難い場合は、病名であっても病態の表現であっても続けて書き表し、病名か病態の表現かの判断は読み手にゆだねることとする。

【注意 1】 2 拍以下の自立可能な意味の成分のうち、独立した名詞と考えられているものは区切って書き表す。

【例】 ノー□ゼンタイ（脳全体） ゼツ□ヒョーメン（舌表面）

【注意 2】 漢字 1 字ずつが、すべて 2 拍以下の自立可能な意味の成分で、対等な関係で並んでいる場合には、意味の理解を容易にするために、適宜区切るかすべてを続けて書き表す。

【例】 テ□アシ□クチビョー（手足口病）

ノー□カン□ジン□ショーコーグン（脳肝腎症候群）

カタ□テ□ショーコーグン（肩手症候群）

モク□カ□ド□キン□スイ（木火土金水）

ボー□ブン□モン□セツ（望聞問切） スン□カン□シャク（寸関尺）

4. 長い複合名詞

複合名詞の構成要素のうち、3 拍以上の自立可能な意味の成分が、二つ以上あればその境目で区切り、2 拍以下の副次的な意味の成分は、そのどちらかに続けて書き表すことを原則とする。

【例】 オトガイ□リューキ（オトガイ隆起） カンセツ□ネズミ（関節ねずみ）

アヒル□ホコー（あひる歩行） イタミ□シゲキ（痛み刺激）

ムスメ□センショクタイ（娘染色体） ガイソク□ジョーカ（外側上顆）

コーセイ□ブッシツ（抗生物質） シキュー□ケイガン（子宮頸癌）

ケツアツ□ソクテイ（血圧測定） テキシュツ□シュジュツ（摘出手術）

カスイタイ□ゼンヨー（下垂体前葉） ナイテンキン□レッコー（内転筋裂孔）

ダイタイコツ□ケイブ（大腿骨頸部） キカンシ□ゼンソク（気管支喘息）

カンケツセイ□ハコーショー（間欠性跛行症）

エネルギー□タイシャ（エネルギー代謝）

リハビリテーション□センター

アタマ□リンキュー（頭臨泣） アタマ□キョーイン（頭竅陰）

5 ゾー□6 プ（五臓六腑） インヨー□キョジツ（陰陽虚実）

キケツ□エイエ（気血栄衛） ホキョ□シャジツ（補虚瀉実）

ソフト□コンタクト□レンズ

フクジン□ヒシツ□ホルモン（副腎皮質ホルモン）

ケイコツ□カカン□リューキ（脛骨顆間隆起）

チューシン□ジョーミャク□エイヨー（中心静脈栄養）

コーゲン□コートイ□ハンノー（抗原抗体反応）

シンケイセイ□キョーチョー（神経性協調）

インケイハイ□シンケイ（陰茎背神経）

インケイシン□ドーミャク（陰茎深動脈）

ジョーワンシン□ドーミャク（上腕深動脈）

キョーコツボー□リンパセツ（胸骨傍リンパ節）

ガンカジョー□セツコン（眼窩上切痕）

シナプスゼン□マッタン（シナプス前末端）

フクマクコー□キカン（腹膜後器官）

ダイインシンコー□レンゴー（大陰唇後連合）

カンセツホーガイ□ダッキュー（関節包外脱臼）

キンチョーセイ□ケイハンシャ（緊張性頸反射）

センイ□ガサイボー（線維芽細胞）

ケンコー□オージンタイ（肩甲横靭帯）

カンツイ□オージンタイ（環椎横靭帯）

ガンメン□オードーミャク（顔面横動脈）

サシンボー□シャジョーミャク（左心房斜静脈）

シキュー□コーカンマク（子宮広間膜）

ショーソク□シジョーミャク（掌側指静脈）

【注意1】複合名詞の構成要素の一部が動詞から転成したもの、または形容詞の語幹を含んでいる場合で、自立性が弱く区切ると意味の理解を損なうおそれのあるものは続けて書き表してもよい。

〔例〕 タチクラミ（立ちくらみ） ノリモノヨイ（乗物酔い）

 キューアタリ（灸あたり） カラエズキ（空えずき）

オモダルサ（おもだるさ）

【注意2】漢字4字以上の漢語名詞で、自立可能な意味の成分の前か後ろに、副次

的な意味の成分が一つ以上付け加えられたと思われるものは続けて書き表す。

〔例〕 ソーケイドーミャク（総頸動脈）

ナイケイドーミャク（内頸動脈）

ジョーダイジョーミャク（上大静脈）

チョーシクッキン（長指屈筋）

カジューゼツキン（下縦舌筋）

シンチューリンパセツ（深肘リンパ節）

ホーカシキエン（蜂窩織炎）

ショーニシンポ（小児鍼法）

ケンビキョーカ（顕微鏡下）

ワンシンケイソー（腕神経叢）

ジョーセンショクタイ（常染色体）

フナイガイイン（不内外因）

イヒローセイ（易疲労性）

カガンカレツ（下眼窩裂）

コーシケツショー（高脂血症）

コーコレステロールケツショー（高コレステロール血症）

テイニニニニニニケツショー（低Ca血症）

5. 自立可能な意味の成分に準じて扱う漢語的表現

この項で取り上げる漢語的表現は、通常単独で名詞となることはない。しかし、医学用語内部の切れ続きにおいては自立可能な意味の成分に準じて扱う。

(1) 略語や略称を表す漢語的表現は、切れ続きにおいて自立可能な意味の成分に準じて扱う。

〔例〕 トーシャク□カンセツ（橈尺関節）：橈骨・尺骨

カンジク□カンセツ（環軸関節）：環椎・軸椎

チョーケイ□ジンタイ（腸脛靱帯）：腸骨・脛骨

キョショーシュー□カンセツ（距踵舟関節）：距骨・踵骨・舟状骨

ケイケンハイ□ショーコーゲン（頸肩背症候群）：頸部・肩部・背部

センキョク□ジンタイ（仙棘靱帯）：仙骨・坐骨棘

センケッセツ□ジンタイ（仙結節靱帯）：仙骨・坐骨結節

キョーケンポー□ドーミャク（胸肩峰動脈）：胸郭・肩峰

キョーフクヘキ□ジョーミャク（胸腹壁静脈）：胸壁・腹壁

ガクゼツコツキン（顎舌骨筋）：下顎骨・舌骨

オートツキョクキン（横突棘筋）：横突起・棘突起

ケイトツ□ゼッコツキン（茎突舌骨筋）：茎状突起・舌骨

キョーサ□ニ्यूトツキン（胸鎖乳突筋）：胸骨・鎖骨・乳様突起

シ□エンチャージュツ（肢延長術）：上肢または下肢

(2) 神経や血管、その他対象物の所在・走行・方向・深さ・大きさ・長さなどを表す漢字2字以上の漢語的表現は、切れ続きにおいて自立可能な意味の成分に準じて扱う。

〔例〕 ナイキョー□ドーミヤク（内胸動脈）

ジョーデン□シンケイ（上殿神経）

シンショー□ドーミヤクキュー（深掌動脈弓）

ジョーケイ□シンゾー□シンケイ（上頸心臓神経）

チャーキョー□シンケイ（長胸神経）

ケイオー□ドーミヤク（頸横動脈）

ビシャ□ジンタイ（尾斜靱帯）

コージュー□ジンタイ（後縦靱帯）

ジョーゼン□チャーコツキョク（上前腸骨棘）

ジョーコー□キョキン（上後鋸筋）

センコー□センビ□ジンタイ（浅後仙尾靱帯）

タンコー□センチャー□ジンタイ（短後仙腸靱帯）

ダイコー□トーチョコキン（大後頭直筋）

ウコー□ガイソクシ（右後外側枝）

チュージョー□シソーシ（中上歯槽枝）

カコー□ビシ（下後鼻枝）

コーカ□ショーノー□ドーミヤク（後下小脳動脈）

シンオー□チューシュ□ジンタイ（深横中手靱帯）

カセン□ソケイ□リンパセツ（下浅鼠径リンパ節）

(3) 語尾にあって漢字2字で形態や空間などを表す漢語的表現は、切れ続きにおいて自立可能な意味の成分に準じて扱う。

〔例〕 リジョーキン□カコー（梨状筋下孔） ガンカ□カコー（眼窩下孔）

ガンカ□カカン（眼窩下管） コーマク□ジョークー（硬膜上腔）

クモマク□カクー（クモ膜下腔） ダイ□サコツ□ジョーカ（大鎖骨上窩）

ソクトー□カカ（側頭下窩） ガイソクカ□ジョーリョー（外側顆上稜）

3 カクキン□カホー（三角筋下包） ケンポー□カホー（肩峰下包）
 チコツ□カカク（恥骨下角） キョーコツ□ボーセン（胸骨傍線）
 サコツ□チューセン（鎖骨中線） ケッセツ□カンコー（結節間溝）
 ケンコー□カンブ（肩甲間部）

Ⅲ 促音、数字表記について

1. 促音

促音は、促音符を用いて書き表す。

[例] オートツキ（横突起）	ケツカン（血管）
ケツショウ（血漿）	ケンコー□セツコン（肩甲切痕）
コツタン□ナンコツ（骨端軟骨）	セツケツキュー（赤血球）
セツシ（切歯）	ゼツコツ（舌骨）
ゼツシツ（舌質）	ゼツタイ（舌苔）
ハツケツビョウ（白血病）	ロッカン□ドーミヤク（肋間動脈）

【注意】「キ」または「ク」で終わる字音が、次の字音と結合しているもののうち、次のような語は、結合の部分が促音化しているか、「キ」または「ク」の発音を保っているかにかかわらず、その部分をなるべく「キ」または「ク」と書き表す。また「ツ」で終わる字音が次の字音と結合して促音として発音されていても、意味の理解を容易にする場合には、促音符を用いず「ツ」と書き表してもよい。

[例] キョクカキン（棘下筋）	セキキン（赤筋）
ソクカンセツ（足関節）	ダイタイ□チョクキン（大腿直筋）
チューソクコツトウ（中足骨頭）	ハクキン（白筋）
ロクケイ□ドーミヤク（肋頸動脈）	
コーシケツショウ（高脂血症）	ナイゼツキン（内舌筋）

2. 音で読まれる数の書き表し方

数量または順序を意味する語で、漢字音のまま発音する場合には、数字を用いて書き表すが、数量や順序の意味の薄れた慣用語では、意味の理解を妨げない限り、仮名を用いて書き表す。数を含む医学用語には、数量や順序の意味があるものが多い。

[例]	1 カイ□カンキリョー (1 回換気量)	ガク 2 フクキン (顎二腹筋)
	ガイソク□ケイ 3 カク (外側頸三角)	
	ジョーワン□ 3 トーキン (上腕三頭筋)	3 サ□シンケイツー (三叉神経痛)
	ダイ 4 □ノーシンケイ (第 4 脳神経)	1 2 シチョー (十二指腸)
	5 0 カタ (五十肩)	3 三陰□ 3 ヨー (三陰三陽)
	3 ショー (三焦)	5 コー (五香)
	5 ゴー□ 6 プ (五臓六腑)	8 コー□ベンショー (八綱弁証)
	キケイ□ 8 ミャク (奇経八脈)	1 4 ケイ (十四経)
	カンツイ□ジュージ□ジintai (環椎十字靱帯)	
	ゼン□ジュージ□ジintai (前十字靱帯)	

3. ローマ数字

ローマ数字は、該当するアルファベットに外文字を前置して書き表す。それが大文字1字の場合には、外文字の後ろに大文字を添えて書き表し、複数のアルファベットすべてが大文字の場合には、二重大文字を添えて書き表す。ただし、大文字と小文字を特に区別する必要のない場合には、外文字の後ろの大文字や二重大文字を省略してもよい。

[illegible]

IV 数字を含む経穴名等の点字表記

数字を含む経穴名等の書き表し方は、『日本点字表記法 2001年版』第1編・第2章・第3節「数字やアルファベットなどを用いた語の書き表し方」6. および7. に従う。

1. 数字を含む経穴名

これらは仮名で書き表すことを原則とする。

[例]

督脈：ヒャクエ（百会）

大腸経：ジカン（二間） サンカン（三間） テサンリ（手三里） テゴリ（手五里）

胃経：シハク（四白） アシサンリ（足三里）

膀胱経：ゴシヨ（五処）

腎経：シマン（四満）

三焦経：シトク（四瀆）

胆経：ゴスー（五枢） チゴエ（地五会）

肝経：アシゴリ（足五里）

2. 数量や順序の意味が強い経穴名

これらは数字を用いて書き表す。

[例] 3 三陰交（三陰交） 3 ヨーラク（三陽絡） 3 ショーユ（三焦俞）

4 シンソー（四神聡） 4 カ（四華） 8 ジャ（八邪） 4 ホー（四縫）

10 セン（十宣） 8 プー（八風） 17 ツイ（十七椎）

3. 要穴、組み合わせ穴の名称

これらは数字を用いて書き表す。

[例] 4 ソーケツ（四総穴） 8 エケツ（八会穴）

8 ソーケツ（八宗穴・八総穴） チューフー□7 ケツ（中風七穴）

カッケ□8 ショ（脚気八処）

4. 和語の数字を含む組み合わせ穴

これらは仮名で書き表す。

[例] ムツギュー（六つ灸）

V 同音異穴の点字注記

1. 経過

現在日本国内で使用されている「経絡経穴概論」の教科書には、WHOが定めた

361の経穴が掲載されている。その中には、異なる経穴でありながら同じに発音するいわゆる同音異穴が17組含まれている。これらは漢字で表記すれば文字が異なるので一目瞭然であるが、漢字を用いない点字では読み手の理解を助けるために何らかの工夫が必要となる。

日本点字委員会はこの点に注目し、1994年開催の第30回総会でこの問題を取り上げ、研究討議の結果を『日本の点字 第20号』に「同音異穴の点字注記標準化についての提案」として掲載した。今回はこの提案をベースとしつつ、その後の時間経過の中で生じた幾つかの変化を考慮してこの稿を作成した。例えば、客主人の正式名称が上関に変わったことで、同音異穴が16組から17組に増えた。また、同字同音異穴であった竅陰・五里・三里・通谷・陽関・臨泣が、部位名を冠して、頭竅陰・足竅陰・手五里・足五里・手三里・足三里・腹通谷・足通谷・腰陽関・膝陽関・頭臨泣・足臨泣となったことにより、これら6組は同音異穴から完全に外れることとなった。

2. 注記の考え方

同音異穴を注記によって区別するという事は、経穴名以外の観点で説明して経穴を区別するという事にほかならない。その観点として次の四つが考えられる。

- (1) 経穴の国際番号
- (2) 所属経絡名
- (3) 部位説明
- (4) 漢字説明

これらのうちどの観点で説明するかは、その場の状況に応じて最も適切な観点を選ぶ必要がある。例えば、試験問題で経穴の所属経絡名を問うような場合、経絡名で注記するわけにはいかない。また、部位を尋ねる問題では、部位説明による注記は用いられない。書き手は、注記一般の原則である短く簡潔で分かりやすくを旨とし、その場その場に応じた柔軟な対応を求められることとなる。

次に、四つの観点について詳述する。

- (1) 経穴の国際番号

1989年にジュネーブで開催されたWHOの鍼用語標準化国際会議の決定に従うこととする。

(2) 所属経絡名

経絡のフルネームは長いので、例えば「肺経」「大腸経」など臓腑名のみを含む短縮形で示すのが妥当と考えられる。

なお、天宗（肩）と天窓（頸）は、共に小腸経なので、「小腸経11」「小腸経16」のように番号を併記して区別することが考えられる。

(3) 部位説明

同字同音異穴に関するWHOの呼称に準拠し、「手」「足」「顔」「腹」などの語で表すことが考えられる。

腹部と大腿部の境にある脾経の衝門は、「足五里」にならって「足」がよいであろう。「腹」では肝経の章門との区別ができない。同じように、臀部と大腿部の境にある膀胱経の承扶は「足」、腋窩にある心経の極泉は「手」がよいと考えられる。

また、肺経の少商と心経の少衝は共に手にあるので、肺経の少商は「親指（オヤユビ）」、心経の少衝は「小指（コユビ）」と細かく表現することが考えられる。

(4) 漢字説明

少海と小海のように漢字1字だけが異なる場合は、その異なる1字だけを取り上げて説明し区別することが考えられる。承泣と商丘のように漢字2字とも異なる場合は、2字ともに取り上げて説明することが考えられる。

また、漢字説明の仕方については、次の優先順位が考えられる。

ア. 常用訓のある漢字は、その常用訓

〔例〕曲泉（キョクは曲がる） 商丘（商う、オカ）

イ. その漢字を含む熟語

〔例〕衝陽（ショーは衝突のショー） 不容（不可能のフ、内容のヨー）

ウ. その漢字の部首など字形

〔例〕下腕（カンは肉月に完全のカン） 箕門（キは竹冠に代名詞のソレ）

エ. その漢字の意味

〔例〕懸^{けんり}釐（懸ける、治める意味のり）

顴^{けんりょう}膠^{ほおぼね}（ケン^{けんりょう}は顴骨^{ほおぼね}を意味する大貝のケン）

3. 注記の具体例

(1) キモン

箕門：S P 11 脾経 足 キは竹冠に代名詞のソレ

期門：L R 14 肝経 腹 キは期日のキ

(2) キョクセン

極泉：H T 1 心経 手 キョクは極まる

曲泉：L R 8 肝経 足 キョクは曲がる

(3) ゲカン

下関：S T 7 胃経 顔 カンはセキ

下脘：C V 10 任脈 腹 カンは肉月に完全のカン

(4) ケンリ

懸釐：G B 6 胆経 顔 懸ける、治める意味のリ

建里：C V 11 任脈 腹 建てる、サト

(5) ケンリョー

顙髎：S I 18 小腸経 顔 ケンは頬骨^{ほおぼね}を意味する大貝のケン

肩髎：T E 14 三焦経 肩 ケンはカタ

(6) ショーカイ

少海：H T 3 心経 肘前面 ショーは少ない

小海：S I 8 小腸経 肘後面 ショーは小さい

照海：K I 6 腎経 足 ショーは照る

(7) ジョーカン

上関：G B 3 胆経 顔 カンはセキ

上脘：C V 13 任脈 腹 カンは肉月に完全のカン

(8) ショーキュー

承泣：S T 1 胃経 顔 承る、三水の泣く

商丘：S P 5 脾経 足 商う、オカ

(9) ショーショー

少商：L U 11 肺経 親指（オヤユビ） 少ない、商う

少衝：H T 9 心経 小指（コユビ） 少ない、衝突のショー

承漿：C V 24 任脈 顔 承る、將軍のショウの旧字体の下に水

(10) ショーフ

少府：H T 8 心経 手 少ない、大阪府のフ

承扶：B L 36 膀胱経 足 承る、扶養するのフ

(11) ショーモン

衝門：S P 12 脾経 足 ショーは衝突のショー

章門：L R 13 肝経 腹 ショーは文章のショー

(12) ショーヨー

商陽：L I 1 大腸経 手 ショーは商う

衝陽：S T 42 胃経 足 ショーは衝突のショー

(13) シンドー

神堂：B L 44 膀胱経 背外側 ドーは公会堂のドー

神道：G V 11 督脈 背正中 ドーはミチ

(14) チューリョー

肘髎：L I 12 大腸経 手 チューはヒジ

中髎：B L 33 膀胱経 尻 チューはナカ

(15) テンソー

天宗：S I 11 小腸経11 肩 ソーは宗教のシュー

天窓：S I 16 小腸経16 頸 ソーはマド

(16) フヨー

不容：S T 19 胃経 腹 不可能のフ、内容のヨー

跗陽：B L 59 膀胱経 足 足偏に付属のフ、陰陽のヨー

(17) ヨーコー

陽綱：B L 48 膀胱経 背 コーはツナ

陽交：G B 35 胆経 足 コーは交わる

4. 注記の付け方

(1) 注記を文中に入れると文の流れを中断することになる。そこで、必要最小限度にとどめ、入れる場合も短く簡潔にを大原則とする。

(2) 同音異穴であっても、前後の文脈から明らかにその経穴を特定できる場合は、注記を入れる必要はない。また、同じ経穴が繰り返し出てくる場合で、最初に注記すれば足りる場合は、後の繰り返しには注記を付ける必要はない。

(3) 注記の前後は、点訳では点訳者挿入符、書下ろしなどではカッコ類でくくる。なお、書下ろしなどで、墨字版と点字版に共通の説明カッコを第1カッコで表しており、それと注記のカッコを区別したい場合は、第2カッコや点訳者挿入符などを用い

ることができる。

(4) 注記の位置については、次のように考えられる。

ア．経穴名の直後につけることを原則とする。

〔例〕 極泉（心経） 天窓（小腸経11） 期門（腹）

小海（ショーは小さい） 少商（少ない、商う） 不容（S T 19）

イ．文の流れを損なわないために、注記を経穴名の前におくこともできる。

〔例〕（肝経の）章門 （顔の）懸釐

ウ．経穴名の直後に文中注記符を書き、欄外などに注記の内容を記載する方法もある。

5. 今後に向けて

点字であるがゆえに同音異穴の取り扱いにおいて不利益を被ることがあるとすれば、それはまことに由々しいことといわざるを得ない。極力そのようなことのないよう、条件整備に努めなければならない。試験問題・指導用教材・教科書・専門書などに携わる方々に活用していただければと願う次第である。

VI 漢方薬などの名称の切れ続きについて

漢方薬は一般に漢方医学における薬物として用いられ、5～15味の生薬を組み合わせ、主に湯剤（煎剤）として服用されるものである。

漢方薬の調合素材である生薬は日本薬局方において動植物の薬用とする部分、細胞内容物、分泌物、抽出物、または鉱物などで医薬品として173品目が収載されている。いわゆる草・根・木・皮や犀の角・熊の胆などの類で自然物を薬用として用いる点に特徴がある。

これらの漢方薬関係の用語の切れ続きは、基本的には以下のように行う。

1. 生薬名の切れ続きについて

生薬の名称には生薬の産地や製造法などを素材名の前に付したものがあるが、多くは漢字1字・2拍以内であるので切らずに表記する。

〔例〕 ワソージュツ（和蒼朮） ドニンジン（土人參）

サンシャクヤク（山芍薬）

カラモツコー（唐木香）

ヤキクカ（野菊花）

ホーブシ（炮附子）

2. 漢方薬名の切れ続きについて

漢方薬の命名は調合される生薬や調合方法あるいは煎じ薬・丸薬・粉薬など薬物の方式などを表現しているものが多い。

【調合する生薬に付属される用語例】

前置されるもの：加減、加味

生薬の間に配置されるもの：加、去、合

後置されるもの：丸、散、湯、飲、飲子、丸料、丹料

そこでこうした命名の意味が判読できることを基本として、以下のように書き表す。

（１）前置・後置されるものについて

ア．漢字１字２拍以内は切らないで続ける。

湯、散、丸、膏、丹、飲などは前の語に続ける。

〔例〕 ケイシトー（桂枝湯） マフツサン（麻沸散）

８ミ□ジオーガン（八味地黄丸）

イ．漢字２字以上・２拍以上は区切る。

加減、加味、飲子、飲料、丸料、丹料などは前後を区切る。

〔例〕 カゲン□シャハクサン（加減瀉白散）

ケイシ□ブクリョー□ガンリョー（桂枝茯苓丸料）

カミ□ショーヨーサン（加味逍遙散）

ウ．生薬間に配置される文字＝加、去、合など

前後の生薬の調合法を示している語は、漢字１字であっても意味を確実にするため前後を区切る。

〔例〕 ケイシ□キョ□シャクヤク□カ□ショクシツ□ボレイ□リュウコツ□

キューギャクトー（桂枝去芍薬加蜀漆牡蠣竜骨救逆湯）

ショーサイコ□ゴー□ハンゲ□コーボクトー（小柴胡合半夏厚朴湯）

ただし、生薬の名前に加、去、合の文字が含まれているものは続けるよう留意する。

〔例〕 ビャクゴー□ケイシトー（百合鷄子湯）

（２）生薬名が複数並んでいる場合の切れ続き

生薬名が複数並んでいる場合には、一生薬名ごとに区切る。

また、生薬名の1字を取って並んでいる場合も区切る。

[例] アキョー□ケイシオートー（阿膠鶏子黄湯）← 阿膠 鶏子黄

リョー□カン□キョー□ミ□シン□ゲ□ニントー（苓甘姜味辛夏仁湯）←
茯苓、甘草、乾姜、五味子、細辛、半夏、杏仁

（ブクリョー カンゾー カンキョー ゴミシ サイシン ハンゲ キョーニン）

（3）人名に氏が付いている漢方名の切れ続き

人名に氏が付いている漢方名の氏は続ける。

[例] シンシ□カツ□ボクトー（沈氏葛朴湯）

（4）数量の意味が薄れた語や生薬名の数字の書き方

数量の意味が薄れた語や生薬名の数字は、仮名で書く。

[例] ジューゼン□ダイホトー（十全大補湯）

リョー□カン□ゴミ□キョー□シントー（苓甘五味姜辛湯）

日本点字委員会第47回総会報告

日本点字委員会は、2011年6月4日（土）・5日（日）の両日、日本ライトハウス情報文化センター（大阪市西区江戸堀）において、日本点字委員会研究協議会並びに第47回総会を開催し、次の事項を協議した。出席者は53名。

総会審議事項

1. 小林一弘副会長の辞任が承認され、後任に金子昭委員が副会長に就任した。

2. 各専門委員会について

(1) 医学用語点字表記専門委員会：今回「医学用語切れ続きの指針」等に関する最終答申を行い、総会の決定をもって解散する。

(2) 点字科学記号専門委員会：加藤俊和委員から委員長辞任の申し出があり、承認された。委員長人事は会長預かりとし、質問への対応、実務など必要なときには加藤委員にお願いする。正式に委員長を選べるように努める。

(3) 点字楽譜専門委員会：本日をもって解散する。点字楽 ― 譜の手引等の編纂が日点委において必要となったときは、編纂委員会を立ち上げる。

3. 世界点字協議会（WBC）に関する報告（田中徹二）

第1回会合を一昨年、マドリッドで行い、その方向性を決めた。今年9月の「点字21」（於・ライブチヒ）の開催、ユネスコから発行されている“World Braille Usage”（世界の点字の一覧表）の第3版の発刊、などである。「点字21」において日本からのアピールをしようと考えている。

4. 『ルイ・ブライユ ― 天才の手法』翻訳・出版について（金子昭）

日本点字制定120周年（2010年）記念出版として、National Braille Press から2006年3月6日に発行された C. Michael Mellor 著、“Louis Braille: A Touch of Genius”を発行する。今その翻訳を進めている。

5. ホームページ準備に関する報告・提案と運営担当者の選出

①ホームページを開設する。②会長よりホームページ担当者6名（当山啓・加藤三保子・白井康晴・畑中優二・福井哲也・藤野克己）が指名された。

研究協議

1. 『日本点字表記法』における書き方の形式等に関する検討（継続議案）

第45回総会に近点研から提案された標記の課題について、日点委関東小委員会、お

よび関東地区点字研究会から検討結果の報告があった。脚本や対談のレイアウトについて、問題点のあることを確認して、次に進むこととした。

2. 外文字で書き表すことができる用例の追加および変更に関する提案

近畿点字研究会より、現行「表記法」2章3節9.の【注意1】の規則「略称と単語との区別がつきにくい場合などでも、外文字を前置して書き表してもよい」の「など」の範囲を「もう少し広くしたい」という趣旨の提案があった。継続して研究していくこととした。

3. 「日本点字表記法のあり方」検討に関する特別委員会の設置について

下記のとおり承認された。

(1) 諮問内容：「日本の点字」第35号特集に寄せられた意見、今総会で出された意見を基に次の項目について検討し、次回総会に答申する。①日本語の点字表記の「日本点字表記法」での位置づけ、②専門分野の点字表記の「日本点字表記法」での位置づけ、③書き方の形式等の「日本点字表記法」での位置づけ、④墨字書の点字化の扱い、⑤「参考」の扱い。

(2) 委員会：委員は5名程度とし、日点委委員・事務局員・会友の中から委員を公募する。

(3) 設置期間：今総会から次回総会まで。

〔後日、7名の委員から応募があり、全員が会長から委員に指名された。委員は、金子昭・藤野克己・加藤俊和・加藤三保子・福井哲也・宮村健二・渡辺昭一の7名である〕

4. 「医学用語切れ続きの指針」等に関する最終答申

医学用語点字表記専門委員会より、「はじめに」「医学用語切れ続きの指針」「促音、数字表記について」「数字を含む経穴等の点字表記」「同音異穴の点字注記」「漢方薬などの名称の切れ続きについて」の各項目にわたって報告が行われた。専門分野の範囲において、医学用語の点字表記についてこの答申に添って運用する。今後この内容を「日本の点字」に掲載するなどして広報するとともに、関係機関に周知する。

5. 「文節関係と分かち書き・複合語の切れ続き・固有名詞などの切れ続き」の提案

木塚泰弘委員より、次の提案があった。《点字仮名では、文の最小単位である文節を、分かち書きと切れ続きの説明に用いることが必要である。点字は触読者が必要とするものなので、触読者が「読みよく、書きよく、わかりよく」しなければならない》。この提案を各地域委員会に持ち帰って検討することとした。

編 集 後 記

「日本の点字」第36号をお届けします。

日本点字委員会では、ナショナル・ブレイル・プレスから2006年3月6日に発行されたマイケル・メラ著『ルイ・ブライユの生涯 ― 天才の手法』を翻訳・出版するために作業を進めてきました。日本点字制定120周年（2010年）記念出版として企画したのですが、完成が遅れていることをお詫びします。本号の巻頭言はその翻訳に携わった一人・金子昭の「ブライユ伝翻訳余話」です。メラ氏のブライユ伝は、ブライユの手紙（直筆・代筆）を多く引用していることから、その生き方、人間関係が生き生きと伝わってくる、というのが特徴だと思います。

長年の懸案だった日本点字委員会のホームページを2011年9月1日に開設しました。以前から、日点委での決定事項の普及方法が限られていることは課題となっていました。また、点字・点訳に関わる人の中からも、「日点委のことはどこで知ればいいのか」という声も聞かれました。新設されたホームページがそのことを改善する一助になれば幸いです。このホームページは日点委からの情報発信が中心ですが、日点委発行の書籍の注文や、問い合わせを送ることもできます。日点委と点字関係者の「相互コミュニケーション」のツールとして育てていただきたいと思います。開設検討委員として関わってきた加藤三保子委員の「日本点字委員会ホームページの開設と今後の運営について」をお読みくださればと思います。

本号で一番多くのページを占めているのは、「医学用語の点字表記について」です。あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の国家試験に使用される点字の表記と、普段全国の視覚支援学校並びに諸施設において使用されている点字教科書の表記とが統一されるよう、従来から望まれていました。2011年6月5日、日本点字委員会第47回総会は、それまで4年にわたって討議してきた、医学用語点字表記専門委員会による答申を受けて審議した結果、本書のように決定しました。今後とも、よりよい医学用語点字表記へ発展するよう願っています。よろしく願いいたします。

（金子 昭）

日 本 の 点 字 第36号

2012年 1 月27日発行

発 行 日 本 点 字 委 員 会

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

電話 (03)3209-0671

FAX (03)3209-0672

振替口座 00100-1-42820

ホームページ <http://www.braille.jp/>

印刷所 コ ロ ニ ー 印 刷

〒162-0034 東京都中野区江原町2-6-7
